

---

# 花言葉で10のお題(SS集)

小笹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花言葉で10のお題（SS集）

### 【Nコード】

N2556BA

### 【作者名】

小笹

### 【あらすじ】

時代恋愛ファンタジー。10人のヒロインによる10の恋模様。各題によってヒロインが異なりますが、同じ世界・時間での物語となっています。各話は1500字〜2000字程度でサクッと読めます。今回の作品はある一つの物語から成り立っているのですが、作者の能力的&日常のスケジュール的に本編を描くのはまだ早いと思っています。「でも少しだけなら……」と思い、描いたオムニバスSS集です。雰囲気重視したつもりなので”雰囲気”を味わっていただければ幸いです。お題は配布サイト様よりお借りしたも

のです

## 紫陽花〜あなたは美しいが冷淡だ（前書き）

時間軸書くの忘れてました：スイマセン…。

時間軸は布袋葵 鳳仙花 金瘡小草 紫陽花 麦藁菊 蒲公英 鷺草 竜胆 スイートピー 董となっています。

人物紹介はあとがきにて。

下記は作品の説明ですが、紹介文にもありました通り、雰囲気味わっていただけだと思います。何が言いたいかというと、ここは読まなくてもいいです！

\*作者による作品解説\*

時代背景

・江戸時代初期

寛永（1624年 - 1645年） - 正保（1645年 - 1648年）頃まで

物語の舞台となる場所、人物たち

- ・主に神山城という城
- ・作品の登場人物たちは神山城で生活している人がほとんどでは「神山城」とは？

この作品の主要舞台となっている架空の城。

武蔵国南部（江戸付近）の神体山にある城で、六階建て輪郭式平城。

本丸（神山城）以外には二の丸（八策御殿 通称：神官殿）と三の丸（世津御殿 通称：巫女殿）などがある。

築城は永禄期。それ以前は平安時代に建てられた屋敷であった。その屋敷はこの時代になると、「お永久屋敷」と呼ばれており、今でも城の周辺の一部として残っている。

- ・「神山一族」とは？

今作のジャンルは「時代ファンタジー」で  
化け物が人の世に害を与えているという設定。  
神山一族とは、妖魔に対抗する強力な力を持つ一族のこと。  
でもこの一族の存在は、世に知れ渡っていない。

#### 用語の解説

- ・妖魔：一族固有の言い方で、一般人は”化け物”と呼ぶ（統一）。
- ・巫女殿：神山一族が身寄りのない子どもたちを引きとり、巫女として養成する施設。

紫陽花　あなたは美しいが冷淡だ

最も雨の降る季節、水無月。

「やあ、刹那」

池の魚たちに餌を与えていた私の前に、彼はやってきた。

綺麗な顔…の人は、嫌い。

それでも、好きになってしまったのだから…。

「どうしたのです？急に…今日は外に出る気分ではないと、言っていたではありませんか…」

素っ気なく対応した刹那の横に、薫は何も聞いていないふうな態度で立った。

2人の間にしばらく、沈黙の時間が流れる。

しかしその沈黙も、薫によって終わりを迎えた。

「君ってさ…」

刹那の聴覚を支配するには充分すぎるほど。その声は、普段よりも少し、低く響いて聞こえる。

「どうして、ここに来たの？」

「…は？」

思いもよらぬ問いに、刹那は目を見開き、ぼかんと口を開ける。

“どうしてここへ”の意味がまず解せなかった。

「君は、中子ちゃんと一緒に、故郷を抜け出して来たんだよね？それで、色々あって今はこの城に身を置いている…」

刹那には中子という親友がいる。いや、親友…と呼ぶべき存在ではないかもしれないが。

その少女と共に、生まれ故郷である里を抜け出し今、この神山城に身を置いている。

つまりは、薫の言う“どうしてここへ”の意味である。

「それは、お永久さまが身寄りのない私となあちゃんを引き取ってくれたから、です…」

この城の現在の当主は神山千寿という男。その男の側室であるお永久の方。

その存在に刹那と中子の2人は、救われたのである。

当主の千寿もまた、自分たちを暖かく迎えてくれた。

「ふう…」

まったく。どうしてあんなにもお優しいお父上を持ちながら、子はこんなにも冷たいのだろう。

「溜め息吐きたいのは僕の方なだけだな…」

この男。普段は飄々としているが、時にひどく恐ろしい表情をする瞬間がある。

人前では見せないのだろう。現にこの城に仕える者たちは皆、彼を？良き継承者？だと思っ込んでいる。

この人のただならぬ“何か”に気付いているのは、おそらく家族とごく一部の人間：例えば自分とか、だったりする。

元々、刹那も薫ほどの身分の人間に近づけるほどの位置にはいなかった。

親友の中子の出世により、刹那もその力添えがあり、ようやく本丸の女中になれたのだ。

お永久に拾われた時はまだ、巫女殿と呼ばれる三の丸にある身だったのだから。

「では…薫さまは…」

苛立ちを覚えているのは、おそらく自分だけではなく、彼もだろう。



それでも聞かずにはいられない、素朴な疑問がある。

「なぜ、私の隣にいるのですか？」

城の女中となつてから、刹那に近寄つてきたのは薫の方だ。

中子の親友である刹那の身の上も、知っていただろうに。

何せ中子は、薫の姪にあたる、この城の姫君・みなものお墨付きなのだから。

それなのに薫は近づいてきた。

溜め息が吐きたいのならば。私がここにいることを疑問に思っているのであれば。

私に関わらなければいいのに。

そう思う気持ちと、近づいてきてくれた嬉しさが交差に揺れ、刹那を葛藤させる。

綺麗な人、でもとても冷たい人。それでもなぜが気になつて仕方ない人。

いつの間にか“特別”となつてしまった想いに、悩みながらも満たされるもの。

「…だって、綺麗なもの」

「…え？」

彼から発せられた言葉は、これまた意外なもの。

そして…

「殺したいほど、好きだよ？」

思わず息を呑んだ。そんな驚いた表情を見せた私を、目の前の男は滑稽そうに笑っている。

「どうしたの？そんな顔して」

悔しい。

頭が一瞬にして、ずっしりと重くなったのを感じた。そして、身体も熱くなる。

本当に…綺麗な人。妖しい色香に酔っている。そうは自覚していても、一度気に入った濁酒からは、なかなか抜け出せない。

黙した刹那を笑う薫。そんな薫をただただ見つめる刹那。

そんな2人に、天は見飽きたのだろうか。ポツリ、ポツリと空から雫が落ちてくる。

「…ん？雨か…」

雨が降り始めた。この季節は雨がよく降る。

その雨にさえ気付かない程、刹那の身体は火照っていた。

「どうしたの？中に入るよ。風邪引くから」

その言葉にやっと反応した刹那も、薫と共に城へ入っていく。

「そろそろ…紫陽花が見られるかもね…」

呟いた彼の表情は、普段見せる穏やかなものとは、少し違っていた。

あなたは確かに美しい　けれど、それと同時に…。

紫陽花〜あなたは美しいが冷淡だ（後書き）

紫陽花編の登場人物（名前のみも含む）

刹那 - せつな

「紫陽花」のヒロイン。神山家次期当主の薫君に想いを寄せる、神山城の女中。

神山 薫 - かみやま かおる

神山家当主、千寿とその正室の子。次期当主。既婚。身分の差がある刹那に想いを寄せている。  
理由あつて11年間、仮死状態にあつたため、その身は11年前のままである。

以下は名前のみの登場

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

神山家現当主。3人の息子と1人の娘がいる。

神山 みなも

千寿の孫であり、薫の姪にあたる神山城の姫。中子を侍女として傍に置いている。

中子 - なかこ

刹那の親友。薫の妹の子、みなも姫に仕える侍女。

お永久の方 - おとわのかた

故人。神山千寿の側室。千寿にもっとも寵愛された女性。

## 葷々小さな幸せ

「今日から、よろしくお願いしますね」

煩い。そんな優しい笑みを浮かべたって、私は騙されないんだから、です！

武蔵国の神山宗家、当主の息子に嫁いで早一月。

三河の神山家当主の姫、文は「側室」という位置に置かれた。

宗家当主・千寿の三男坊である零は、三の丸「巫女殿」に属していた巫女見習い、ややを正室として迎え、寵愛している。

その話を嫁ぐ前に聞いて、文姫は悲しい気持ちと同時に、激しい怒りを覚えた。

なぜ、自分がそんな人のもとへ嫁に行かなければならないのか。

しかし、数十年、文姫が生まれる前に一族のなかで起こった裏切りにより、ぎくしゃくとした関係は続いていた。

その問題も未だ解決されておらず、一族の当主は頭を悩まされている。

そんな中、少しでも関係を修復しようと思いいたる結果、それが政略結婚だ。

現に他の神山家である、近江・越後・美濃・駿河からも正室、側室として宗家に呼ばれている。

だから…自分ひとりだけ「嫌だ」と、首を横に振ることで、父が身の縮む思いをするのは御免だ。

けれど、出会って間もない男子に心を開けるほど、文姫は素直ではない。

「家に…帰りたいです…」

神山城の庭の木陰で、文姫はひとり呟いた。

身を丸くして、まるで何かから隠れているような姿勢で、次は大きく溜め息を吐く。

すると、何やら木陰の向こうから…ちよつと池のある方角から足音が聞こえてくる。

（また、来た…）

そう心のなかで呟くと、今度は身を丸くするだけではなく、息も潜める。

見つかってなんてやらないです。

「文姫？今日は何処に隠れているのです？」

苦笑交じりの声色。柔和な、優しい男性の声が聞こえてきた。彼女の夫である零だ。

嫁いでこの方、零は文姫に対し大変、積極的に話し掛けてくるのだ。なぜ？と文姫は不思議で仕方無かった。

寵愛している正室がいるのに、なぜ自分にこんなに優しく接してくれるのだろうか。

彼の正室・ややもまた、自分を暖かく迎えてくれた。

普通、正室にとってしてみれば、側室は邪魔な存在でしかないはずだ。

寵愛されているのなら尚更、気分のいいものではないだろう。

零にも似たようなことが言える。愛している女性以外を自分の妻として迎え入れる。そのことに対し、正室に後ろめたい気持ちは無いのだろうか。

もしかしたら、自分を何かの餌にはめるために…。

そんな考えがよぎり、文姫は零とややに対し、物凄い警戒心を向けている。

(信じられない…)

自分に素直な好意を寄せるなんて…。

あの夫婦には何か裏があるに違いない。

だから、今日もこうして彼から逃れている。

それも不思議なことに、零しか自分を探しに来ないのだ。今までも、今日も。

すると必然的に、ややは何をしているのだろうか、疑問が浮かぶ。ほら…きっとややはそんなに自分に興味が無いのだ。あの暖かさも夫の前での偽善に過ぎない。

いや、それよりももっと恐ろしいものがあるに違いない。

2人は共同して、自分を貶めようとしているのだ。

今日も見つかっては…

「見つけました！今日はここにいたのですね」

「ふぎや！？」

しまった！見つかってしまったです！

色々なことを考えていたら、どうやら聴覚が鈍っていたらしい。

さっきまで聞こえていた、足音を完全に聞き逃していた。

「文姫。今日はあなたに贈り物があります。受け取っていただけ



ますか？」

そう言っつて、彼は片手に持っていた花を彼女に渡した。

文姫は、そわそわと戸惑いながらも、その花を受け取った。

どこまでも、優しい声、暖かい笑み。そんな彼が文姫に贈りたかった花。

「董です。綺麗な色をしていますよね？」

今はまだ。疑いが晴れない。こんな優しい人が、いるはずがない。その笑みも、もしかしたら何かの策略が秘められているかもしれない。

だから、思わず本音を出してしまった。

「どうして、私に優しくするのですか？」

「え？」

零はきよとした顔で文姫をのぞき見た。

「私は、邪魔ものじゃないですか！ やや様はとてもきれいな方だし、零様もあの方が好きなんでしょう？」

だったら…私は2人にとって、要らない存在でしかないです…」

怖い。自分が本音を零に伝えたことにより、もしかしたら、零も今まで言わなかった本音を吐くかもしれない。

文姫は構えるようにして零と対峙した。

しかし、次に聞いた言葉は予想と反して……。。

「…嬉しいです。やっと、あなたの声をよく聞けました」

目も、心も大きくなった気がした。まさか、そんなことを言うだなんて。

「私、ずっとあなたとちゃんと話したいと思っていました。だから、やあの力も借りたくなかった」

文姫が顔を上げると、そこには心底ホツとしたような表情を浮かべる零がいた。

“ やあの力を借りたくなかった ”

だから、やあの力と共に、自分を探しに来なかった？

「だって、文姫は私の妻ですから」

視界が滲んで、目から熱い雫がこぼれる。

なんて、優しい笑みのだろう。

「な、なぜ泣くのです！？怪我をされたのですか…！…それとも、わ、私が何か傷つけることでも…っ」

信じてもいいのですか？

今、目に見える暖かいものを。

溢れる涙が董の花に、落ちた瞬間。それは幸せそうに小さく、揺れた。

## 葦く小さな幸せ（後書き）

葦編の登場人物（名前のみも含む）

文姫 - あやひめ

「葦」のヒロイン。政略結婚で千寿の息子、零のもとへ「側室」として嫁いだ頑固なお姫さま。

神山 零 - かみやま れい

神山家当主、千寿とその正室の子。三男。葦編の段階では既婚。気弱だが心優しく、物腰柔らかな男性。

薫同様に理由あって11年間、仮死状態にあつたため、その身は1年前のままである。

以下は名前だけの登場

やち

「葦編」の段階では神山零の正室。夫同様に心優しく、美しい女性。

**竜胆々あなたの悲しみに寄り添う（前書き）**

12歳以上対象の作品ですが、あくまで”対象”です。12歳未満の方の入場をお断りするものではありません。

## 竜胆、あなたの悲しみに寄り添う

最初は、自分が幸せになりたいから、振り向いて欲しいと、そう思っていたけれど。

でも今は、違う。私はあなたの傍にいられて幸せ。だから、今度は私があなを幸せな気持ちにしてあげたい。

それが叶わないのなら、せめて寄り添いたいと、思う。

美濃から来た薫の側室である、お咲の方から頂いた花、竜胆。

私の故郷ではなかなか、お目にかかれない花だ。

絵や家紋などで見たことはあるが、本物を見たのは初めてのこと。

何となくだが、切ない、胸が締め付けられる気分になった。

（あの人に、似ているからかも…）

そんなことを思いながら、神山宗家当主の二男・桜の正室、お夕絵の方は今日も自室の床につく。

嫁いで、もうふた月。だが、桜とともに食を取ったこともなければ、床についたこともない。

しつこく毎日、彼の部屋を訪れた結果、ここ数日はなんとか口が利けるまでに至った。

だが、その会話も、互いに口を開けば喧嘩ばかり。

「それでも…頑張ったじゃない、私」

もともと、政略結婚に「愛情」を求めてはいけないと頭では知っていた。

だが、そうだとしても欲しかった。相手が選べぬなら、決められた相手でもいい。

形だけの夫婦だなんて、考えられない。

ここに来る前、宗家当主の息子は3人いると聞いた。

長男の薫。華やかで接しやすく、有能な人物だという。

三男の零。穏やかで優しい人物だという。

そして、自分が嫁ぐことになった二男の桜。

評判は3人の中で1番低かった。彼は幼少時にある事が原因で左目を失明した。それゆえ、常に片目を眼帯で隠している。

いや、隠しているのはその隻眼だけではなく、彼の身そのものも、

だ。

左目を失明して以来、彼は城に籠もりきりとなり、人目を避け自分の部屋でただただ日々を安穩として過ごしている。

それは、兄を補佐するでもなく、弟の背を押すでもない。

更に、これは宗家につとめている人間だけが知るところであるが、城内ではある噂が囁かれていた。

桜の左目の負傷は、彼のもう一人のきょうだいである妹の飛鳥姫が原因らしい。

幼少の頃、桜と飛鳥姫は仲が良く、外に遊びに出かけることなど日常茶飯事であった。

だがある日、飛鳥姫が城外に出掛けた際、妖魔に襲われ掛けたのだ。

その妖魔を桜は幼いながらに、見事撃退したが、その代わりに左目を持っていかれてしまった。

そこまでの話ならば、素晴らしい武勇伝である。が、本題はここからだ。

桜の左目の失明に伴い、飛鳥姫は当然のことながらに負い目を感じるようになる。

きょうだいであるなら、尚の事。腹違いとは言え、姫にしてみれば立派な兄上だ。



追い詰められた姫は、兄も自分も、精神的・肉体的に成長したことで、ある行動に出たのである。

…ただの噂だ。義姉にあたる飛鳥姫が、まさかそのようなこと。

兄の失明に負い目を感じた姫は、自分の身を捧げること、兄へ償いをしている。

桜さまは幼少時から、腹違いの姫に好感を抱いていた。

もし…もしもそれが、真ならば、これほど泣きたい気持ちになることはない。

(考えないのが、一番良い…)

現実から逃れるようにして、お夕絵の方は目を閉じた。

春も梅雨の季節も過ぎ、夏の涼しい風が城内にも馴染んできた。

「さて…今日も…」

あの方の部屋へ、挨拶に向かわなければ…。

桜の部屋には、早朝に挨拶に行くのが日課となっている。目が覚め、着物に着替えたらずぐに。

意外に遠い、彼の部屋へ足を運ぶ。正直、その足取りは重い。

ようやく彼の部屋の前に辿り着くと、お夕絵は勢いよく襖を開けた。

「いつまで寝ているのですか!?!とっくと……っ!」

珍しい事もあるものだ。彼はいつも、私が訪れる時間ではまだ、眠っている。

だがそこには、寝巻姿で婀娜っぽくはあるけれど、全身を起こして空を眺める桜の姿があった。

「……………」

「何だよ……」

入った時。こちらには気付いてもいないような態度だった彼が、おもむろに話し掛けてきた。

桜の瞳は赤い。それは、特異的な神山一族に受け継がれる血筋の所為。

けれど、その瞳がどうしようもなく憂いを帯びているように、見えるのだ。

「相変わらず……花のような人ですね……」

そう口に出した瞬間、自分の部屋に咲く竜胆を思い出した。

儂げなその存在。触れるのが怖い。手折ることも容易いから。そし

てその様が目の前の男に似ている。

「…例えば？」

聞かれて、その花の名を答えそうになったが、私はそれをあえて、声に出して言わなかった。

「自分の名前に聞いてみてくださいー！」

竜胆。なぜかって？桜よりも、あなたに似合っているから。

そう、辛気臭いところとか…。

## 竜胆「あなたの悲しみに寄り添う（後書き）」

竜胆編の登場人物（名前のみも含む）

お夕絵の方・おゆえのかた

「竜胆」のヒロイン。政略結婚で千寿の息子、桜のもとへ「正室」として嫁ぐ。

夫の愛情を得たいと思う一方で、彼の悲しみに触れたいと願う日々を送っている。

神山 桜・かみやま さくら

神山家当主、千寿とその側室の子。幼少時に左目を失明し、眼帯でその瞳を覆い隠している。

薫・零同様に理由あって11年間、仮死状態にあったため、その身は11年前のままである。

以下は名前のみの登場

神山 薫・かみやま かおる

桜の一つ年上の異母兄。紫陽花編を参照。

神山 零・かみやま れい

桜の異母弟（年は同じ年）。董編を参照。

神山 飛鳥・かみやま あすか

竜胆編での呼称は「飛鳥姫」。桜とは”特別な関係”だという噂が城内に流れている。

鷺草編を参照。

お咲の方・おさきのかた

神山薫の側室。凜とした華やかさがある。

スイートピー〜私を覚えていて

近江の屋敷が懐かしい…。

帰りたいと、思わない日は一度もなかった気がする。

あの人は、私に興味を抱いていないようだったから…。

寝たきりになってから、もうどのくらいの月日が経ったのだろうか。

神山宗家当主の長男・薫の正室である雪乃は、そんなことすら考えられない程、弱り切っていた。

今、雪乃は薫との間の子を胎内に宿している。

もう生まれるまでに、何日も要さないだろう。

(せめて…この子を産むまでは…)

死ねない。最近では寝たきりの身でありながら、毎夜のこと神へ懇願する。

どうか、この子だけは御救い下さいませ。

「この子だけは…」

思わず口に出して言う。念仏を唱えるように。しかし、今の彼女には自分の行動すらも意識することができない。

ただ、そんな朦朧とした意識のなかで、思えることといえば…。

この子をどうしても、産みたい。

寂しい。

それくらいしかない。薫が自分に振り向いてくれないことに対して、憂うこともあったが、それも今ではどうでもいいこと。

ただ、女の身として、せめて授かった子を産みたい。

勤めを果たしてからではないと、死んでも死にきれない。

「神様…お願い…」

精神的にも肉体的にも疲れ果てた女の、最期の望みがそこにあった。

「…！…ううっ…うっ…ああああ！」

急に今までに感じたことのないような、激しい痛みが腹部を襲った。

「雪乃さま!？」

悲鳴を聞き、駆けつけた女中が慌てふためいて雪乃の部屋に入って

きた。

「あ！だ、誰か！！雪乃さまが、産気づかれました！」

辛い。痛い。苦しい。ああ、近江に帰りた。

「……うっ……うっ……」

しばらくすると、痛みが引いた。しかし、それから間もなく再び腹部に激痛が襲う。

それをなんと繰り返したか…。

私を見守る女中のなかに、一際美しい女性がいる。

彼女は私の近くに歩み寄ってきて、優しく汗を拭いてくれている。

誰でもいいから自分を見守っていて欲しくて、私は彼女に縋るようにして話し掛けた。

「あ…あなた、は…」

声を絞り出す。喉の渇ききったような、老婆のような声になっていた。

そんな雪乃の声とは対照的に、

「はい」

凜とした、美しい声で宗家当主、千寿の重臣・杏は返答した。



「さ、びしく…ない…の？」

前から聞いてみたかった。

女の身でありながら、宗家当主の重臣となり、その若さと美貌を持ちながら、ただこの一族のためだけに生きる様を見て。

「……」

ふっと、全てを悟ったような笑みを浮かべ、目の前の美女は自分を見つめた。

「ええ」

きつぱりと、堂々と答えるその姿を見て、自分とは懸け離れた世界の住人だと、雪乃はそう感じた。

雪乃はそんな杏を、見つめ返して笑う。

「……ふっ……っ！……うああああ！……っ」

今まで以上に、強い痛みだ。そしておそらく、この痛みを乗り越えた先には…。

「……！……雪乃さま……」

せめて産声だけでも、と思ったが。もう、産むこと叶えばそれでいい。

益荒男さえも恐れるであろう、心強い美女に支えられながら、雪乃  
は母となるため最後の力を振り絞った。

……

。

横になっているはずなのに、眩暈がする。

「やあ。雪乃。よく頑張ったね」

聞こえるはずのない声が、見えるはずのない姿が、雪乃の思考を一  
層狂わせた。

「来て…くれたのですか…？」

体調を崩し、寝たきりの生活になってから、夫は一度も妻の様子を  
見に来なかった。

産気付いた時も、出産のその時も…。

だが、湧きあがった感情は、自分でも予想外なことに穏やかなもの  
だった。

「ありがとうございます…」

ただただ、夫が傍にいたことが嬉しくて。

死ぬ時も、独りなのかと不安だったけれど…。

久しぶりに喜びを感じることができた雪乃。その表情は、薫が今までに見たことがないほど、幸せように微笑んでいる。

「立派な、男子だよ」

子どもは「若君」であった。男子出生ということならば、一族も大いに喜んでくれるだろう。

「どうやら私は、果報者らしいです」

最高の死に際である。子も産めた。そしてその子は男子だった。

そしてこうして、今。

決して望んでも叶わないであろうことが、起こったのだ。

「あなたに会えて…幸せでした…」

知っている。あなたは、私以外の、“誰か”を見ているということ。を。

知っていた。あなたが、本当に冷たい人だということ。を。

今、知った。あなたを、こんなに愛していたのだということ。を。

「雪乃…」

涙で滲む視界。その視界の中に、おぼろげな薫の顔が映っている。

薫は雪乃の髪を梳くようにして撫で上げ、その後、彼女の耳元でそっと囁いた。

「おやすみ。そして…ありがとう」

いいえ。ありがとう、だなんて。私は、幸せなのですよ？

だから、そんな震えた声で、言わないでください。

ずっしりと重くなった瞼。味わったことのない強烈な睡魔。

「私を…」

忘れないで。

……  
夢を見た。

そしてそれがきつと、彼女にとって最後の夢。

あたり一面、花畑。生まれて初めて見る花だった。その花は多彩な色を持っていて、愛らしい。

赤、桜色、藤色、青、山吹色、白…。

色鮮やかな花たちに囲まれ、雪乃は幸せそうに笑う。

『ありがとう…』

愛しい人の声が聞こえた。空から響いている。だが、その姿までは

見えない。

『君の望みは、何？…もう、叶えてあげられないかもしれないけど…』

その声に、雪乃はこう答えた。

どうか、私を忘れないで。あなたの記憶に、刻んでください。

## スイートピー〜私を覚えていて（後書き）

スイートピー編の登場人物（名前のみも含む）

神山 雪乃・かみやま ゆきの

「スイートピー」のヒロイン。

神山薫の正室。薫との間に子を宿すが、その身は病弱で…。

杏 - あんず

鳳仙花編を参照。

神山 薫 - かみやま かおる

雪乃の夫。紫陽花編を参照。

## 以下は名前のみの登場

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

神山家現当主。3人の息子（薫・桜・零）と1人の娘（飛鳥）がいる。

## 布袋葵く揺れる想い

あなたを愛しています。

あなたに愛されて幸せです。

けれど…本当にいいのでしょうか。

私はあなたを好きでいて、あなたに愛されていて、本当にいいのでしょうか？

ここは神山城。三の丸、別名「巫女殿」。この曲輪では、身寄りのない女たちが一堂に集まり、有能な巫女となる手解きをされる。

いわば修行場ということだ。ややもその内の一人で、今現在、巫女見習いとして三の丸で日々、鍛練に励んでいる。

しかし、あまり才能がないのか、いや霊能力がないのか、やはり師である飛鳥から皆伝を受け取れないでいる。

(どうしてなんて、わかっているもの…)

自分がどうして、巫女殿の人たちよりも劣っているのか…。

それは。

「やや」

恋している。ということも、一理あるかもしれない。

ややの恋人。それは、神山宗家の当主・千寿の三男、零である。

気の弱い彼は、花を愛するのが好きで、よく庭を散策している。

ややも花が好きで、城内の庭の手入れに参加することが多々あった。

そんな彼女の前に、零は現れたのである。それが、出会い。

価値観の似ている2人が、打ち解けるのにそれほどの時間は要さなかった。

あの時、零の恋人となった時の嬉しさは言葉では言い表せない。

『愛しています』

身分違いも甚だしいのは、覚悟の上だった。

しかし、零の…というよりも、千寿の子息3人とも、婚期が遅れており、むしろ恋人ができたのは喜ばしいことだと、千寿の重臣・杏が言っていた。

長男の薫も仮死状態から目覚め、年も年なので先日やっと、近江の神山家から雪乃という姫を迎えたばかりである。

早く祝言を上げてほしいのでは？と周囲は騒いだが、ややはそれに



戸惑い結局、現在もあやふやなまま、日々“恋人同士”として過している。

なぜ、戸惑うのか。その理由は多数ある。

まず、第一に自分の身分が低いこと。数十年前、当主の千寿は身分の低い女性と恋に落ち、側室として迎え入れた。

しかし、そのことが発端となり、一族の中で「裏切り」が起こったという。

自分がその「次」の引き金となるかもしれない、という恐れから。

第二に、妖魔さえも恐れる強大な力を持つ神山一族。

その一族が持つ霊能力は、一般の神官・巫女を遥かに超越している。

そんな中、才能のない自分は、零の負担となるのではないか？いや、もっと言えば、一族の重荷になるのではないか？という固定観念から。

そして、第三に。最大の問題が、彼女にはあつた。

「…や？…やや？」

いつの間にか、自分だけの世界に入っていたらしい。

零が隣で話しているのが、聞こえていなかった。

「い、ごめんなさい…零さま…ポーっとしてしまって…」

ややが慌てて、返答すると零は心配そうに微笑んだ。

「やや…最近、体調でも悪いのですか？」

完全に零を心配させてしまっている。

なんて、優しい人。あなたの笑みを見るたびに、私の罪悪感が増してゆく。

きっと、私はあなたと別れたほうがいいのだ。

けれど、そう思う以上に好きだから、離れたくない。

「いいえ。大丈夫です」

本当に。身体は何ともない。けれど、心が…痛む。

だって…だって私は…。

やあの生まれは、武蔵国の小村である。貧しいながらも穏やかな家庭だった。

しかし、小村を焼き尽くした大火事により、両親は帰らぬ人に。

弟も、その火事が原因で行方不明に。そうして現在、ややは神山一

族に拾われ、巫女としての力を極めながら、生活している。

父、母、弟。そしてやあの4人家族。

照れ屋だが、優しい父。のびやかで、綺麗な母。明るくて、やんちゃな弟。

そう…本当に、良き家庭であったと思う。

ただ、一つの問題を除いては。その問題。それは、やあの父にある。彼女の父親の母。つまり、やあの祖母にあたる存在。その祖母は、実のところ鬼の妖魔であった。

したがって、その祖母から生まれた父は半分、鬼の血を受け継いでおり、その子であるやかも、多少なりとも鬼の血を受け継いでいる。

「……」

それだけのことならば、どうってことはないのだ。

人に危害を加えたり、迷惑をかけたりするわけでもないのだから。

ただ、神山家の人間と添い遂げるとなると、話はまったく違ってくる。

まさか、「自分の父は半分、鬼だ」ということは誰にも言えないし、言ったとしたらこの家にとっては大問題である。

それに…このことが零に知られたら…どうしよう。

嫌われる、なんてことはまずない。彼はそんな人間ではないから。

きつと、今まで通り優しく、接してくれるだろう。

「だからこそ…怖いんです…」

「え?」

今まで黙っていた口を、開いた。

当然のことながら、その第一声が、彼にとっては不可思議なものだったのだろう。

ややを覗き見るその顔も、無垢な零。

そんな彼に居ても立ってもいられなくなったややは、とっさに出た言葉でこの状況に終止符を打つ。

「もうすぐ、夏になりますね!零さま」

そう言って、一歩、二歩…彼から少し距離を置くようにして離れた。

「よかった…」

零は呟き声で言うと、離れて行ったややに歩み寄り、彼女の細い髪

に触れた。

「あなたに……いつ渡そうと思っていたのですが……」

恥ずかしそうに、彼が着物から取り出したのは……。

「簪……ですか……？」

「ええ……葵の絵柄が入っているんです。ややに似合うと思って……」

本当、優しい人。

離れなければならぬ。けれど、あなたの笑顔を見るたび、離れたくなくなる。

いつも、揺るがないと思っていた決意が、揺らいでしまうのだ。

「結っていただけますか？」

お願い。この想いに、早く決着をつけさせて？

## 布袋葵く揺れる想い（後書き）

布袋葵編の登場人物（名前のみも含む）

やや

「布袋葵」のヒロイン。この話の段階では零の恋人。  
心優しい優美な女性。董編にも名前のみで登場している。

神山 零 - かみやま れい

布袋葵編の時点では、ややの恋人。董編を参照。

以下は名前だけの登場

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

スイートピー編を参照。

神山 飛鳥 - かみやま あすか

ややの属する神山城三の丸・巫女殿修行場の師。  
竜胆編を参照。

## 蒲公英〜思わせぶり

昔、彼が作ってくれた蒲公英の花飾り。

それを頭に飾ってくれるたび、くすぐったくて、嬉しかった。

そう。昔から、今も何も変わらない。彼の私への態度。

だから、もしかしたら自分に好意を寄せてくれているのかもしれないと、思ってしまった。

敵一行の搜索をここ数日、京たちは続けていた。

しかし、気配を消して隠れているのか、一向に見つからない。

とうとう人探しに飽きたらしい、味方の一人である久遠は、今日一日動くことをしなかった。

それに伴い、皆の中では比較的、体力がない日向も彼に便乗し、休憩を取ろうと頭領である睡に提案し、今日は一日休みとなった。

「ねえ、京。久しぶりにあそこ、行こうよ！」

日向は久しぶりの休みに嬉しくなり、想い人である京を誘った。

「え…？…ああ…」

今日の彼は、いつもより少しボーっとしているようだ。

久しぶりの休暇、とでも言っていいたいだろう。

そのため本来、温厚で若干ではあるが天然である京の“素”が大いに出ている。

(やっぱり京は、可愛いなあ…)

今、京や日向を含めた5人の集団は、彼らが敵視する4人組を追っている。

強大な力を持つ神山一族の現当主・千寿の関係者。

この4人組である。

しかし今は、そんなことなど関係ない。

休憩時間は楽しく、想い人と2人で過ごせれば、それだけでいい。

(あいつらを追っているうちに、京がもし過労で倒れたりでもしたら…)

彼は仲間5人の中でも、主人に特に信頼されている。

だから主人に対しての忠誠も厚いし、無理を承知で追撃をすることも多々ある。



もしもそのことが身体に祟ったりでもしたら…。

日向はそんな良からぬ想像をしながら、ひたすら隣にいる愛しい男の姿を見つめた。

……。

しばらくして、2人が行きついた先、それは大きく広がる蒲公英畑だった。

「うわぁ…」

「相変わらず、素敵な場所だね」

咲き誇る蒲公英の花に見とれながら、日向は飛び込み、京もそんな彼女の隣に腰かける。

心地良い場所。2人だけで、過ごす日々。

しばらく思いつきり息を吸い、日向は横たわったまま、隣の男の様子を窺っていた。

やはり少し、いつもよりも気抜けした、穏やかな表情である。

そんな彼の心を、独り占めしたくて、日向は思わず話し掛けた。

「ねえ、京。昔よく作ってくれた花飾り。また作ってよ！」

「え…、ああ。そういえば、よく作ってたね。うん、いいよ」

彼は無数に蒲公英を摘み、手際良くそれを、編み始める。

久しぶりに作るというのに、やけに手際がいい。

(相変わらず器用だなあ…私も修行しなきゃ…)

ついつい真剣に彼の手を眺めていて、そして少しだが、不器用な自分が情けなくなってきた。

自分ももう少し器用だったなら、彼の隣に相應しい女子になれるだろうか？

それともこのまま、ずっと妹みたいに扱われ続けるだろうか？

器用になったね日向、偉い。

などと、また子ども扱いされてしまうのだろうか？

そう思うと、日向は顔を切なげに歪ませた。

すると、そんな彼女の異変に気付いた京が、優しくいたわる。

「どづした？具合でも悪い？」

そういって、京は日向の額に手を当てる。すると慌てたようにして、

日向は京の手を振り払った。

それと同時に、笑顔の表情を繕う。

「だ、大丈夫！ちょっと嫌なこと思い出しただけ！ほら、それより早く作って？」

そんな日向の行動に、少し呆気にとられた京だったが、しばらくすると、思い返しように自分の作業を再開した。

「……」

いつも、誤解してしまう。そうやってすぐ、私を心配したり、慰めてくれたりするから。

思わせぶり。でもそれは決して、彼が意識的にしていることではない。

分かっている。彼が、女性や子どもに優しいことは。それでも、自分だけに優しくしてほしい。

そう思うのは間違っていると、気付いていても。

「できた！はいどうぞ、お姫様」

からかい交じりの優しい声。

すると、ふわりとした感触が日向の頭上に舞い降りた。

くすぐったいが、心地よいそれは、彼女の曇った心を一気に晴らし

てくれる。

「似合っているよ」

ほら、また。そういうことは、好きな人にだけ言つてよ。

無自覚な人間ほど、残酷な人はいない。

つくづくそう思う。でも、そんな無垢なあなたの心に、どうしても惹かれてしまうのだから。

頑張ろう。この恋が、実るために。

負けないんだから。

## 蒲公英〜思わせぶり（後書き）

蒲公英編の登場人物（名前のみも含む）

日向 - ひなた

「蒲公英」のヒロイン。仲間である京を慕う。普段は元気で明るい娘。

京 - きょう

日向の想い人。穏やかで優しい人物。

日向たちの”主人”に一番信頼されているらしい。

以下は名前のみの登場

5人の集団（京、日向は除く）

久遠 - くおん

京と日向の仲間。

睡 - すい

5人の集団の頭領的存在。京と日向の仲間。

あと1人は名前が登場していないため、紹介いたしません。

主人

日向ら5人組の主人。京のことを特に信頼しているらしい。

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

日向たちが敵と見なしている神山家の当主。

スイートピー編を参照。

神山千寿の関係者4人組

名前が登場してないため、紹介いたしません。

## 鳳仙花く触れないで

もったいないよね。いつも彼はそういう。

もったいないですよ。いつも彼女はそういう。

もったいない人だ。いつも、周りはそういう。

何が？なにが？ナニガ？

一体、何が「もったいない」のだろう…。

神山城本丸。数日前から体調を崩し、ただの風邪ではあるものの老いた身体には堪えるらしい。

杏の勤めは最近、もっぱら千寿の看病だった。

今も、千寿の寝室で彼の世話をしている。

彼女は女の身でありながら、神山宗家の当主である彼の重臣である。最も信頼され、俊敏に仕事をこなす彼女を、千寿はいたく気に入っているらしかった。

武術にも優れ、人並み以上の霊能力にも恵まれ、まさに才色兼備の「高嶺の花」。

加えて、その美貌。宗家の人間で知らぬものはいないであろう、美しさ。

ここ最近では、宗家以外の一族にも、その評判が伝わってきている。現に、宗家の時期当主である薫が、彼女の才を認め、求婚したほどである。

そんな杏にも、ただ一つ。自分でも、周囲の人間も気付かない、弱点がある。

「もつたいないのう…」

床につく主が、着物を繕っていた彼女を見て、呟いた。

杏はぴたりと作業をやめ、千寿に顔を見やる。

「また、その話ですか」

真顔で答えを返す彼女の瞳は、「そんな話に興味はない」と言いたげで。

“もつたいない”。周囲が彼女に言う、その理由。

薫に求婚された際、彼女はその話を問答無用で断った。

理由は簡単なこと。



神山家時期当主に相応しい妻は、自分ではないと判断したから。

それに、才に富むからという理由での婚姻には、周囲を浮上させるだけではなく、全体の倦怠にも繋がりがねない。

何より、杏本人が婚姻に興味を示さなかった。

(皆、酷なことを言う…)

薫に求婚を断った際にも今、千寿に言われた同様の言葉が返ってきた。

「私は、今のままで十分です」

きっぱりと言い放った後、杏は再び繕い物に没頭した。

そんな杏の、目の前に横たわる主は、少し悲しげな表情で彼女を見つめていた。

……。

しばらく、2人の間に沈黙が流れてから、おもむろに千寿は口を開いた。

「杏…」

杏は手を止め、俯いたまま、無言でその言葉の続きを待った。

「今日は、少し休みなさい」

「…え？」

「このところ、ろくに羽を伸ばしていなかったろう。」

目の前の女性に、千寿はその時、何を思ったのだろうか。

杏は静かに立ち上がると、千寿の部屋を後にした。

確かに、千寿の言うとおり、ここ数日は外の空気を吸っていなかった。

杏は思い至った末、城下町には出ず、城内を散策することにした。

久々に、感じる足袋の履き心地は良い。

虎口から本丸を出ると、杏は人知れず出丸を目指した。

あそこには、彼女がひそかに気に入っている場所がある。

何も無いところではあるが、そこが良い。

（一人になるのは、久しぶり…）

静かな気持ちになり、心も同時に浮上してくる。

出丸。以前は最下級の下女であった中子が、前に生活していた場所だ。

そこは木が生い茂り、長閑な雰囲気醸し出していた。

「…ん？」

木々以外、何も無い空間に一輪、赤い花が咲いている。鳳仙花、である。

杏はその花に近づき、その場にしゃがんでそっと見つめた。

春風にふわりと揺れたそれには、異様な存在感がある。

(似た者同士…)

鳳仙花。じっと見つめっていると、まるで他人ではないように感じてきた。

「…………ふう……」

誰もいない。だが、1人にしてはやけに小さなため息を吐く。

一輪、たった一輪だが、その存在は目にも鮮やかな紅色で、揺れる花弁はその花の生気を煌々と放っている。

しばらく物思いにふけっていると、背後からやってくる人物に彼女は気付けなかった。

「やあ、杏ちゃんじゃないか」

「…………っ!？」

ビクッと背が震えた。

その存在に気付いた瞬間、一瞬で考えていたことを忘れてしまった。ハツとして振り返り、杏は背後の人物に上体を起こし、向き直る。

「薫さま、どうしてここに？」

神山薫。この城の当主、神山千寿の長男。

「実は数日前、僕の知り合いから文が届いたんだよ。今日か明日にでも、久々にこの城に来るっていうから、城外で待ってるんだよ」

自由な気質の薫はそういうと、

「まったく…相変わらずですね」

呆れたように、だが確実に鋭い口調と表情で、言う。

すると薫は、小さく苦笑し、徐々にその笑いを大きくしていった。

「はははっ！いやあく敵わないねえ」。小町殿には！

小町殿。宗家の城内での、杏のあだ名である。

謹厳な少女に感心したように、男は続けた。その表情は、先ほどとは打って変わって、真剣だった。

「見習いましょう。あなたを」

しかし、その真剣な顔もつかの間、次にはとんでもないことを言い

出す。

「じゃあ見習うからさ。取りあえず、僕のお嫁さんになってみない？」

またその話か。

薫はやたら、杏を自分の側室として迎えたらしい。

正室には既に、雪乃という病弱な奥方がいるが、それよりも気丈で丈夫な相手が欲しいと見える。

いや、おそらく現当主のお気に入りである彼女を妻にしたとあれば後々、楽だからだろう。

少なくとも、薫は杏を“手駒の一部”として見ているのであって、恋心を抱いているわけではなかった。

杏も一族のためを思えば、薫と婚姻を結ぶべきであることは承知していた。

しかし。

「丁重にお断り申し上げた筈ですが。もう一度、言った方がよろしいですか？」

そう。理由も去ることながら、彼女はそういった類の話に全く興味が無い。

（私に、生涯の伴侶など不要）

触れないで、ふれないで、フレナイデ …。

誰も、私という存在に。

## 鳳仙花く触れないで（後書き）

鳳仙花編の登場人物（名前のみも含む）

杏 - あんず

「鳳仙花」のヒロイン。通称”小町殿”。

女の身でありながら神山家当主、千寿の重臣。誰もが見惚れるほどの美女である。

神山 千寿 - かみやま せんじゆ

杏を心から信頼する神山家当主。スイートピー編を参照。

神山 薫 - かみやま かおる

紫陽花編を参照。

以下は名前だけの登場

中子 - なかこ

みなもの侍女。麦藁菊編を参照。

神山 雪乃 - かみやま ゆきの

スイートピー編を参照。

## 麦藁菊く永久の記憶

「みなも様あゝ？私、ちょっと出かけてきますね」

主人に外出を断った後、中子はある場所を目指し、神山城を後にした。

（今日で…ちょうど二年）

もう、迷いはない。これから見つけ出さなければならぬ、自分のため。

踏ん切りをつけなければ…。未練たらしく想っていても、幸せはやつてこない。

でも、せめて。懐かしみたいと、思う。愛しかった、あの日々のこと。

神山城より少しばかり離れた森林に、深く澄んだ泉がある。

中子は、その場所がいたく気に入っていた。

今日はいつも着る鮮やかな着物から、白無垢のように真っ白な着物



に変え、城を出た。

中子の主であるみなもは、いつもと違う様子にきよとんとした表情で見つめていたが、彼女が外出を申し出たことで、何かを悟ったように微笑んだ。

(みなも様には…言っていないはずですが…)

もしかしたら、杏あたりが話したのかもしれない。みなもが知られざる、自分の過去を。

城からあまり遠くないためか、考え事しているとあっという間に目的地に着いた。

「綺麗…」

相変わらず、美しい場所だ。

泉の前に腰掛け、中子はそっと瞳を閉じ、思い出していた。

毎日が輝いていた、幸せな日々のことを。

……。

『吉乃殿。綺麗な私に、何か言うことはないんですか？』

そう言った中子は化粧をし、白無垢を纏っていた。

得意げに微笑み、目の前の男に褒め言葉を要求する。

じっと見つめると、男は照れたように赤面し、ぼそっと呟いた。

『そ、その…綺麗で、す』

「聞こえない」、と文句を言うと、彼は中子から背を向け、頭を掻く。

吉乃と中子。森林の奥、澄んだ泉がある場所で、2人は出会い恋に落ちた。

吉乃は城下町に住む、一介の町大工である。

そんな吉乃に中子は、“ある小さな屋敷に、女中として働いている”と微妙な嘘を吐いていた。

中子が本来つとめている神山城。神山家は、強大な霊能力を持つ一族である。

平安時代より、山にその身を隠し、影で世を支えているこの一族。

決して一介の人間には、その正体を明かさない一族。

そんな城に仕えているとは、例え想い人だとしても言えない。

しかし、思いもよらぬ事態に今、陥っている。

中子は、吉乃の子を宿したのだ。

まさか、こんなことにはなると思わず、一族にも吉乃との交際を黙っていた。

だが、身籠ったとしたならさすがに一族には、白を切りとおすわけにはいかない。

親友の刹那を除いては一切、誰にも交際を公言していなかった。

どうしようかと刹那に相談した結果、千寿の重臣である杏に、ひとまず事情を説明した。

すると杏は、呆れたような顔をしつつも、当主である千寿にその旨を伝えてくれたのだ。

千寿は納得し、中子と吉乃が婚姻することにより、一族からの絶縁を許可してくれた。

決して、一族のことを公言してはならないという条件を、守った上での許可である。

(こんなに幸せ…なんて…)

少し怖いくらいだ、と思ったが。

今までの自分を振り返ってみると、かなり頑張ってきたと我ながら思う。

親友と故郷を抜け出し、神山家で下女としての日々を送ってきた。

寒い城外の小屋での生活は、正直堪えた。でも、そんな生活ともも

う無縁となる。

(せつちゃんと毎日、会えなくなるのは…ちょっと寂しいけど)

親友の刹那は、今も神山城の巫女殿で日々、修行に励んでいる。

だが、彼女は中子の懐妊や婚姻を、我が事のように喜んでくれた。

そして、定期的に会いに行く約束もしてくれたのである。

『中子殿。…いや、“中子”』

祝言は明日。

実のところ、白無垢の着付けを自分で済ませた中子は、一番にその姿を見せるため彼の部屋を訪れたのである。

だって、着付けを誰かにしてもらっては、本当の意味で彼に、一番初めに見せたことにはならないから。

『はい』

『これからも、よろしくな』

幸せになる。それは、中子が幼少の頃より、ずっと願っていたものだった。

その幸せが今まさに、目の前にある。

優しい夫、そして…まだ見ぬ自分と彼の子。

男の子かな？女の子かな？

『はい…』

夕陽の差す、吉乃の部屋から見える光景。

それは、愛し合った男女の、幸せそうな笑みであった。

……………。

悲劇が訪れる少し前のことを、中子は瞳を閉じ、思い出していた。

忘れたくても、忘れられない記憶。記憶とは、永久に変わらないものだ。

それが、ある人物によっては美化されているかもしれない。

ある人物によっては、おぼろげで曖昧なものになっているかもしれない。

(それでも私の記憶は、変わらない…)

2年も前のことになる。

彼と、生まれるはずだった命が、彼女の人生から消えてしまったのは。

2年も前のことになる。彼が隣町に仕事へ出掛け、そのまま帰らぬ人となったのは。

2年も前のことになる。自分自身が馬に跳ねられ、そのまま胎内の子どもが流れてしまったことが。

(そろそろ…帰ろう)

白い喪着物を身に纏った彼女は、その場から去った。

そんな彼女の憂いを見守るかのように、道端の野菊はそっと揺れた。

## 麦藁菊〜永久の記憶（後書き）

麦藁菊編の登場人物（名前のみも含む）

中子 - なかこ

「麦藁菊」のヒロイン。紫陽花編には名前のみ登場。  
神山みなもの侍女。吉乃という町大工と恋し合う…。

吉乃 - よしの

ある町の町大工。中子と恋仲になり、夫婦となった…。

神山 みなも

台詞なしでの登場。紫陽花編を参照。

以下は名前のみが登場

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

中子の住む神山城の主。スイートピー編を参照。

杏 - あんず

鳳仙花編を参照。

刹那 - せつな

中子の親友。紫陽花編を参照。

## 鷺草く夢でもあなたを想う

可愛い子。さすが私の子ね。さすが、私とあなたの子…。

「みなもちやくん」

大好き。愛娘を後ろからぎゅっと抱きしめて、飛鳥は彼の人を思い浮かべていた。

神山家当主、千寿の一人娘である飛鳥。

彼女の母であるお永久の方は、父である千寿に最も寵愛された側室だった。

そんなお永久が母であり、千寿の間に生まれた姫がたった一人だったということも重なり、飛鳥は人一倍、愛情を受けて育った。

その愛に溢れた生活のなかで、誰に嫉妬されるでもなく、誰に恨まれるでもなかった飛鳥。

お永久は、そんな自分の一人娘を、どうしても“決められた相手”



という理由だけで、誰かに嫁がせたくなかった。

今まで人を愛し、人に愛され育った子に、家に利用されるような形で白無垢を袖に通して欲しくない。

そんなお永久のたつての願いに、千寿はある提案をしたのである。

その時の父の提案は、今でも覚えている。

飛鳥よ、旅してみよ。その目で、心で、選びなさい。

千寿は飛鳥に、旅先で好きな人を見つけておいで、と背中をそっと押してくれたのである。

当時の飛鳥も、恋や旅というものに興味を抱いていた。

旅と言っても一人旅ではなく、護衛一人を付けての旅であった。

そして、出会った。旅先の、小さな村である。

名は玄栄。飛鳥が一目見て、恋に落ちた男性。

当時の飛鳥とは10以上、歳の離れたしかし、好青年である。

彼には既に妻がいて、父を補佐する身であった。

対し飛鳥は、15と云えど、玄栄から見ればまだ“子ども”だった。

それが無性に悔しくなり、飛鳥は玄栄のいる村に留まりながら、彼の背中をひたすら追い掛けた。

“ 追い掛ける ” とはそのままの意味で、いつ何処へ行っても、玄栄の傍に付き纏った。

彼の正妻であるお冴は、そんな様子を微笑ましく見守るだけで。

自分は心底、子ども扱いされていると内心、腹が立った。

こっちは真剣に玄栄のことを想っているのに、当の彼もその嫁も、どうして私と向き合ってくれないのか。

生まれて初めての経験。それは、少なからず飛鳥の心を悩ませた。

相手にしてもらえない、というのが無性に悲しい。

以前、異母兄である桜に大怪我を負わせ、その結果、彼に構って貰えなくなったことがある。

しかし、それとは似ても似つかない、言わば類の違う “ 悲しさ ” 。

… そんな生活のなかに身を投じて、ふた月ほど経ったある日のこと。

『 お冴！行くぞ 』

玄栄はそう叫ぶと、妻のお冴とともに、ある場所へ出掛けて行った。

飛鳥も当然のことながら、それに付いて行く。

『 はっは！お前も来るか！飛鳥 』

『つぶふ…』

また、子ども扱いして！

飛鳥は顔を真っ赤にして、叫びたい衝動に駆られながらも、それでもグツと堪え、黙って付いて行く。

きつといつか、振り向かせてやるんだから！

3人が向かった目的地。それは玄栄たちの住む村のはずれにあった。

(え…?)

そこには、荒れ果てた御堂があった。

玄栄とお冴はその御堂へ入り、中の掃除を始めた。

飛鳥はそれを黙って見守っていたが、ふいに玄栄から名を呼ばれた。

『飛鳥、お前は外で待ってる』

気を揉んでいた自分を気遣ってか、玄栄はそう促した。

彼の言う通り、外で大人しく待つことにしたが、そうするとますます退屈になる。

『はあ…』

手際の良い2人の作業を、外からちらっと覗きみるたび、自分なんて場違いなところにいるのだろうかと思う。

(私…このままじゃ、玄栄のお嫁さんになれない…)

仕舞にはそんな後向きなことまで、考えるようになってしまった。

結局その日、飛鳥は何のために2人に付いて行ったのか、分からないまま村へ帰った。

翌日。

お冴に、昨日の御堂のことを聞いた。なんでもあの御堂は、玄栄とお冴がまだ、夫婦となる前によく雨宿りに利用した場所らしい。

2人だけの思い出の場所。そこに、飛鳥はいない。

『……………』

しんみりと顔を俯いてしまった飛鳥を、お冴はいつもと違う眼差しで見守っていた。

『飛鳥さん、お願いがあるの』

いつになく、真剣な表情のお冴。そんな玄栄の妻に、飛鳥も顔を上げ彼女の言葉の続きを待つ。

『あなたに、玄栄さまの妻になってもらいたいの』

『え…!?!?』

『私は、子どもを授からない身体だから…』

その言葉を聞いたと同時に、ものすごい勢いで風が押し寄せてきた。

『きゃああああ！』

飛鳥は悲鳴を上げ、ついには俯き、自分の身体を防御した。

……。

「……………っ！……………夢……………」

それは、飛鳥にとって“思い出”と呼べる夢であった。

玄栄の妾となった後、娘のみなもを授かり、しばらくあの村で暮らしていた。

しかし、みなもの出生から数カ月後。

母のお永久が危篤したとの知らせを受け、飛鳥は1人、急いで帰城した。

その後起こった、一族の“裏切り”により、15年もの間、娘のもとに帰ることは出来なかった。

そして、やっと再会の日が訪れたと思えば、すでに玄栄もお冴も帰らぬ人となっていたのだ。

(本当に、解せぬ人だった…)

優しいが、たまに遠い目をしていた玄栄。

その瞳には一体、何が映っていたのだろうか…。

そんな不思議な彼に、飛鳥はどうしようもない好奇心があった。

(もう一度眠れば、あの夢の続きを見られるかもしれない…)

今度は是非、祝言の時の夢を見たい。

もう一度、もう一度。愛の結晶を授かる、その日までの夢を。

鷺草〜夢でもあなたを想う（後書き）

鷺草編の登場人物（名前のみも含む）

神山 飛鳥 - かみやま あすか

「鷺草」のヒロイン。

竜胆編では、名前のみ登場している。

神山城主・神山千寿の娘。薫・桜・零の3人の兄がいる（いずれも異母兄弟）。

兄たちと同様に理由あって11年間、仮死状態にあったため、その身は11年前のままである。

玄栄 - げんえい

飛鳥が旅先で出会った彼女の初恋の男性。浮世離れた美貌の持ち主。

正妻であるお冴を愛していた。

お冴 - おさえ

玄栄の正妻。落ち着いた雰囲気を持つ美女だが不妊症である。

神山 みなも

飛鳥の娘。台詞なしでの登場。紫陽花編を参照。

以下は名前のみが登場

神山 千寿 - かみやま せんじゆ

飛鳥の父。スイートピー編を参照。

神山 桜 - かみやま さくら

飛鳥の2つ年上の異母兄。竜胆編を参照。

お永久の方 - おとわのかた

飛鳥の母。紫陽花編を参照。



金瘡小草く待っています 前篇(前書き)

前篇・後篇あります。

金瘡小草く待っています 前篇

もうすぐ、君に会えるんだね。

みなもは、まだ見ぬその存在との対面を心待ちにしていた。

愛しい人との間に、子を授かった。

出産の予定は、来年の春。まだ、それほど大きくない自分の腹。

けれど、着々と自分の胎内で成長しつつある、我が子。

夫の時久とともに神山城に来て、早ひと月。

今までの小さな村での生活が嘘のように、贅沢な暮らしをしている。

だが、個人的にはその生活は窮屈なもので、特別に本丸より離れた屋敷に住ませてもらった。

今その屋敷に、みなもと時久、母の飛鳥と侍女の中子の4人で生活をしている。

みなも等が暮らす、その名を“お永久屋敷”。

神山城の現当主であり、みなもの祖父・千寿がもつとも愛した女性の名が使われている。

住み心地は良く、城よりもまったりとして生活できていた。

外の空気を吸うため、みなもは屋敷の縁側に腰掛けていた。

あたりはもう夕日が落ちそうで、薄暗い。

「みなも様、身体を冷やしたらお腹の子に障りますよ？中に入って下さい」

自身の侍女である中子。

その素っ気ない口調に戸惑いながら、みなもは屋敷の中に入った。

「うん…時久さまは？」

「もう少して、戻られるとは思いますが」

今朝早く、飛鳥とともに本丸に出向いているらしい時久。

帰りが遅いので暇を持て余していたが、夕餉の時刻にも戻ってこない。

居ても立っても居られなかった。

「私、ちよつと本丸に行つてくる！」

寂しくなったみなもは、屋敷に入ったばかりだというのに、縁側から足袋を履いて本丸のある道へと歩を進めた。

「ちよっ…みなも様！」

慌てたような女中の声を無視し、みなもは本丸を目指し、小走りに駆けだした。

……。

「……あっ！母上！」

本丸の虎口の前に、みなもの母・飛鳥はいた。

「みなもちゃん？」

母の姿を見て、ほっとしたみなもは彼女に駆け寄った。

「どうしたの？中子は？」

目を丸くしたまま尋ねる母に、みなもは苦笑いを浮かべここにいる理由を言った。

「まあ…時久殿は、まだ城の中よ？夕餉も、今日は城で頂くことになったの」

どうして、と問うと祖父の千寿が時久を気に入ったらしく、ほぼ強制的に今日の夕餉は神山城でいただくことになったのだという。

がっかりと頂垂れるみなもに、母の飛鳥は優しく手を取り、お永久屋敷へと歩き出した。

「結構、歩いたでしょう？さ、ゆっくりお話ししながら帰りましょうか」

お永久屋敷へ帰る途中、母は今日、城であったことを話してくれた。

千寿と時久が実は、同じ趣味を持っていたということ。

2人の趣味である囲碁で手合わせして、千寿が負けっぱなしだったこと。

飛鳥が手料理を振る舞うと言い出した時、みんな青ざめた顔をしたこと。

「そつえば、今日は城の中で杏の姿を見なかったわね……」

千寿の重臣・杏はほぼ毎日、彼の傍に付き従っているが、今日はその姿を見なかったという。

“杏”という名前を聞いた瞬間、みなもは前々から聞いてみたかったことを母に聞いた。

「ねえ、母上。杏ってあんなに綺麗なのに……どうして一人身なんだろうね？」

みなもには、どうしてもそれが解せなかった。

自分よりも3つほど年上の彼女。才色兼備で何でもできる彼女。

城内では“小町殿”と言われるほどの、美しい女性。

「うーん…杏は理想が高いのかもね？でも、彼女らしくて私はいいと思う」

なるほど。確かに、あれほど美人なら理想も高くても当たり前のような気がする。

この神山城という小さな世界においては、相手も見つけにくいわけだ。

みなもは母親の言葉に妙に納得してしまい、杏の普段の生真面目な表情を思い浮かべた。

(うん。確かに理想高そう…)

.....。

「おかえりなさいませ……ん？時久さまは、どうしたんです？」

侍女の中子が、出迎えに来た。

「ち、ちよつと！やめなさいよ！物騒に包丁持って！」

「大胆だなあ、中子は……」

中子は包丁を持ったままだった。十中八九、夕餉の支度をしていたのだろう。

「それよりも時久さまは？まさか、城で食する……なんて言いませんよねえ？」

その目は、せつかく4人分作ったのに、と言いたげだった。

「あ、あはは……」

目をそらしたまま笑う飛鳥に、中子は怒鳴る。

「なんですか、それ！？せつかく4人分わざわざ作ったのに！！」

苦笑いを浮かべる飛鳥、怒鳴る中子に圧倒されるみなも。

中子の手にある包丁が、本当に自分たちの胸に飛んできそうで怖い。心臓をバクバクさせながら、飛鳥とみなもが弁解をしようと思った矢先。

「ならば、私にも御馳走していただけます？」

美しい声をした女性が、3人の後ろにいた。

「「 杏殿？」

金瘡小草〜待っています 前篇（後書き）

金瘡小草編（前篇）の登場人物（名前のみも含む）

神山 みなも

「金瘡小草」のヒロイン。

神山飛鳥の一人娘。専属の侍女は中子。

夫の時久との間に身籠り、一児を妊娠中。

千寿の孫であり、薫、桜、零の姪にあたる。

神山 飛鳥 - かみやま あすか

みなも母。鷺草編を参照。

中子 - なかこ

みなもの専属侍女。麦藁菊編を参照。

杏 - あんず

千寿の重臣。通称”小町殿”。鳳仙花編を参照。

以下は名前のみが登場

時久 - ときひさ

神山みなもの夫。素朴な雰囲気男性。

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

みなもの祖父。スイートピー編を参照。

お永久の方 - おとわのかた

飛鳥の母。紫陽花編を参照。



金瘡小草く待っています 後篇

中子の作った夕餉を、今日も4人で食べる。

いつもとは、少し違った「4人」で。

「杏？城には帰らなくていいのかえ？」

千寿の重臣である杏が、本丸ではなく別の場所で夕餉を取ることが、果たしていいものなのか。

「今日は時久さまが城に居られますし、たまには殿方同士で酒を酌み交わすのもいいかと」

当主の千寿は、前々から少し思っていたが、杏にどうも弱いらしいことを飛鳥達は知っていた。

「まあ…いざとなれば、時雨殿もいますしね。でも杏殿ほど千寿様に頼られている方はいないでしょう？」

神山千寿に仕える家来は無論、杏一人ではない。

あくまで重臣として一番千寿に頼られているのは杏であるが、補佐

役で他にも時雨という男がいる。

「時雨さんって…どんな人？見たことはあるんだろうけど、あんまり覚えてないなあ…」

城での生活期間が短かったみなもは、未だに会ったことのない人たちには沢山いた。

時雨という男の名を聞いたのも、一度か二度くらいだ。

「なかなかの色男ですよお〜？杏殿のことが好きなんです」

中子が意地の悪い笑みで色っぽい声を出して言うと、杏は眉を吊り上げた。

「そのような噂が立っていることは存じておりますが、本人からそのような話をされたことは一度もありません」

杏は”小町殿”と言われるほどの美女で、城内の男子からも慕われ、想いを寄せられることが尽きないが、本人はそんな話に耳を貸さない。

「杏は、どんな人が好きなの？」

「どのような…とは？」

飛鳥が振った話は、理想の男性はどんな人か？ということだった。

中子もみなもも、飛鳥の聞きたいことは分かったが、杏には理解できなかつたようだ。

(これは…確かに恋をするのは難しそう…)

みなもは自分が恋する時久の姿を思い出しながら、杏を眺めていた。

……………。

結局、夕餉の時間を過ぎても、戌の刻が過ぎても、時久は戻ってこなかった。

杏の話によれば、今日は神山城に泊まるのではないかとのことだった。

(時久さま…)

お腹の子も、寂しがってますよ…。

床に就いた後も、みなもは眠れずにいた。

時久とこれほど、言葉を交わさない日は、本当に久しぶりのことだったからだ。

「はあ…」

何を憂っているのだから。たった半日、会えぬだけだというのに。

そう自分に言い聞かせ、みなもは目を閉じた。

今は寝ること、心を落ち着かせるのが一番。

そう思い立って、みなもは眠ることに集中する。

するとふいに近くから、ととつと足音が聞こえてきた。

（時久さま…！？）

こちらの部屋に向かってくるその足音に、みなもは夫であることを確信して障子をすうと、開いた。

「あ…」

しかし、障子の向こうに居た人物は、みなもの思っていたその人ではなかった。

「みなも様…？」

杏である。その手には、猪口と、おそらく酒の入った壺があった。

意外だった。お酒を飲むような人には見えなかったから。

「晩酌……？」

みなもが問うと、杏は少し困ったような顔をして頷いた。

そんな彼女の様子に、みなもは申し訳なく思った。

おそらく、誰にも見られなくなかったのだろう。

「う、ごめん！」

「ふふつ。いいですよ？…時久さまのことが気になって眠れなかったのでしょうか？」

凶星を指され、みなもは照れたように俯いた。

「可愛らしい…。眠れないのなら、私の寝酒に、お付き合い願えますか？」

思いも寄らない誘いだった。だが、杏に誘われたのが嬉しく、みなもはその誘いを受けた。

杏と2人で話すのは、これが初めてのこと。

いつもは、母がいたり、祖父がいたりする。

女の自分でさえ、ぞくりとするような美女を隣に、縁側に腰掛ける。

みなもは杏に、会釈を申し出て壺を彼女から受け取った。

光栄です、と言いながら猪口に注がれた冷酒を、杏は一気に飲み干した。

祖父の重臣の新たな一面を見た気がして、みなもは少し楽しくなつて笑う。

「意外だったなあ…杏がお酒飲むなんて」

「別に、これと言って好きという訳ではないのですけどね…何となく」

いつも真面目な杏の口から、“何となく”なんて言葉を聞くなんて。

そこには完全に仕事から解放された、杏という一人の人間がいた。

「時久さま…早く戻られるといいですね」

だが、みなもを氣遣うことを忘れない。祖父がなぜ、彼女を重臣として傍に置いているのが、この時、改めて分かった。

「ありがとう。杏…」

……。

翌朝。

そぞろと布団から起き上がったみなもは、きょとんとした表情のまま居間に向かった。

「おはようございます、みなも様」

侍女の中子が、厨房から出てきて朝の挨拶をする。

「おはよう、中子……杏は？」

杏とは昨夜、一緒の部屋で眠ったのだ。

しかし、自分が起きた時にはすでに、彼女が使っていた布団は畳まれていて姿も見えなかった。

居間にいるのかもしれないとも思ったが、どうやら別の場所にいるらしい。

「もう城へお戻りになりましたよ」

そうか。そうだね。私と違って朝は早そうなもの。

昨夜の晩酌を思い出し、みなもはかすかに微笑んだ。

そんなみなもの笑みを見つめて、中子はぼそつと呟く。

「あなたって…本当に」

「？」

何か聞こえた気がしたが、中子はそのまま厨房に戻っていった。

（次は、中子の番かな…）

侍女とは言え、実はまだゆっくりと話せていないのは、いつも近くにいる人だったりする。

それに、何となくだが私は彼女にあまり好かれていないような気が

した。

(時久さま…まだかな?)

早く、帰ってきて欲しい。

「御父上はまだかしら…ね」

みなもは、自分のお腹にそっと手を当てて囁く。

あともう少しだけ、待っているから。

だから早く、生まれてきて。だから早く、帰ってきて。

だからいつか、2人きりで話せるその日まで…。

(いろいろと、待つものが多いなあ…)

でも、それでも。それはきつと、遠くない未来。



金瘡小草〜待っています 後篇（後書き）

金瘡小草編（後篇）の登場人物（名前のみも含む）

神山 みなも

「金瘡小草」のヒロイン。

前述の通り、飛鳥の娘であり千寿の孫、薫・桜・零の姪にあたる。

神山 飛鳥 - かみやま あすか

鷺草編のヒロイン。みなもの母。

中子 - なかこ

麦藁菊編のヒロイン。みなもの侍女。

杏 - あんず

鳳仙花編のヒロイン。みなもの祖父である神山千寿の重臣。

以下は名前のみが登場

神山 千寿 - かみやま せんじゅ

みなもの祖父。スイートピー編を参照。

時久 - ときひさ

神山みなもの夫。素朴な雰囲気の男性。

時雨 - しぐれ

杏の補佐役を務めている。中々の美男子だという。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2556ba/>

---

花言葉で10のお題(SS集)

2012年1月6日17時51分発行